九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

一八五〇年代のドイツ労働運動「鎮静期」の問題（下）

小林，栄三郎

https://doi.org/10.15017/2334011

出版情報：史淵. 73, pp.15-40, 1957-05-28. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

一八五〇年代のドイツ労働運動「鎮静期」の問題（下）

小林栄三郎

八

エリーザベット・トット女史は、ドイツ労働運動の発生史にたいする従来の通説を述べたあとで、三つの批判点をかかげている。

一、一八五〇年代におけるドイツ労働階級（die arbeitende Klasse）の活動にたいする従来の判断は、正当であるか。

二、ドイツ労働運動が一八六〇年代の政党および諸労働組合（die Gewerkschaftsverbände）から始まるとする想定は、承認されうるか。

三、ドイツにおいて、独立した政党が労働階級の労働組合的活動よりも先行するという見解（die Meinung, dass in Deutschland die selbständige politische Partei der gewerkschaftlichen Betätigung der arbeitenden Klasse voraufgeht）は、支持されうるか。（旁点は小林）

こうした批判点をかかげる理論的根拠として、彼女はつぎのように述べている。――およそ社会的運動はそれぞれ一つ

の発展過程である。その過程の経過とリズムは、その過程を制約する経済的および社会的諸要因に起原を求めうる。物質的基礎の歴史的諸時期(die geschichtlichen Perioden) と階級運動の発展局面（die Entwicklungsphasen) とのあいだには、或る範囲内で、直接的相関関係（die direkte Korrelation）が存在する。そもそも労働階級の闘争は、その階級の存在とともに、すなわち産業資本主義の発生とともに始まる。（Der Kampt der arbeitenden Klasse beginnt mit ihrer Existenz, d. h. mit dem Entstehen des Industriekapitalismus.）労働運動の諸形式、および経済闘争ならびに政治闘争におけるそれらの形式の表現(die Formen der Arbeiterbewegung und ihre Gestaltung im wirtschaftlichen und politischen Kampf) は、資本主義的経済の量的および質的展開とともに発展し、変化し、完成する。したがつて労働運動のそれぞれの発展局面は、産業資本主義の諸時期に対応して、あらまし区画（im grossen Zügen abgrenzen）さるべきであろう。ところで、ドイツ産業資本主義の早期（die Frühperiode）は、およそ一八六〇年までに及んでいる。この早期に、それ自体まとまつた労働組合（ein in sich geschlossener Gewerkschaftsverband)、あるいは労働者（die Werktätigen）の政党というものを期待するのは、論理的にも歴史的にも正しくないであろう。なぜなら、「ブルジョワジーのさまざまの部分のすべてが、とりわけその最も進歩的な部分たる産業家（die Industriellen）が政治的権力を奪いとり、自分たちの要求どおりに国家を改造してしまわないうちは、労働者階級（die Arbeiterklasse）の運動は決して独立的でなく、また専らプロレタリア的な性格だけのものでもない」（マルクス、エンゲルス「革命と反革命」）からである。なるほどプロレタリアートは、経済的には必然かつ自動的に階級として発展し、確立されていく。しかし、階級としておこなう闘争には、意識的かつ明瞭な、そして目的の定まつた指導を必要とする。労働者党（eine Arbeiterpartei）の活動には、イデオロギー的独立を要し、この独立は意識的に獲得されねばならない。通常、こうした労働者党の活動には、自然発生的な労働組合的活動に満ちた一時代（eine Zeit voll spontaner gewerk-

schaftlicher Betätigung）（旁点は小林）が先行する。労働者階級の歴史的課題への洞察と、それを実行しようとする意志とのためには、「労働階級の、或る点まで発展した先行組織（eine bis zu einem gewissen Punkte entwickelte previous organisation der Working Class）が必要であり、この組織は、その階級のおこなう経済闘争そのものから発生する。」（一八七一年一一月二三日ボルテ（Bolte）宛のマルクス書簡）したがつて、一八六〇年代以前に立証できる労働者の利益を代表する行動（die Interessenvertretungen der Werktätigen）や彼らがおこなつた資本との対決は、互いに関連しているはずであり、また後の政党や諸労働組合（die Gewerkschaftsverb nde）とつながつているはずである。ヨリ成熟した運動は、「先行諸組織」の上に建てられていなければならぬ。（Die reifere Bewegung muss auf „previous organisations" aufbauen）いいかえると、ヨリ成熟した運動は、産業資本主義の開発期（die Periode der Entfaltung）における自然発生的な労働組合的活動（旁点は小林）から出てくるであろう――とトットは論ずる。（註一）

ここにトットが「労働階級の闘争は、その階級の存在とともに、すなわち産業資本主義の発生とともに始まる」と書いていることについては、問題があろう。労働階級は果たして産業資本主義の発生をまたなければ存在しないのか。トットによればドイツ産業資本主義の早期すなわち第一期は一八〇七年から始まることになつているが、それ以前にもドイツ早期資本主義の段階に労働階級の存在を認めえないか、という疑問も湧いてくる。しかし、これは本稿の主題の外にあるので、立ちいらない。トットは右に見てきたような理論に立つて、従来の初期ドイツ労働運動史の研究を再検討する。彼女によれば、総じてこれまでの研究はドイツ経済の動きと関連づけて考察することを怠つている。そのうえ、ドイツ産業資本主義の早期、とりわけ一八五〇年代における労働者および職人の活動にたいする根本的探求が欠けている。反動陣営の弾圧と二つの大戦とによつて貴重な史料が数多く失われたけれども、残された史料をできるだけ調査することによつて、

彼女は従来の通説を打破しようとする。こうした実証的研究をかえりみるに先だつて、ドイツ産業資本主義の早期を彼女がいかに把握しているかを見ておかねばならぬ。トットによればこの早期は、「一八〇七年から一八一一年までに産業革命とともに始まり、一八五七年から一八五九年までの経済恐慌とともに終つた」（sie〔=Die Frühperiode〕begann in Deutschland mit der industriellen Revolution von 1807 bis 1811 und endete mit der Wirtschaftskrise von 1857 bis 1859.）とされる。原文の前後関係からは、「一八〇七年から一八一一年までの産業革命」（旁点は小林）というような書き方に見えるが、それでは意味がおかしいので、一応「一八〇七年から一八一一年までに」と読んでおく。(註2)

トットによると――フランスの産業生産に遠く及ばず、イギリスのそれにはさらに遥かに立ちおくれていたドイツが、一八六〇年代のうちにフランスに追いつき、イギリスの決定的な競争者となる。こうしたドイツ経済の強力な発展は、主として一八四〇年から一八五九年までの二〇年間の出来事である。一八四〇年代に鉄道の建設にともなつて交通が発達し、商品生産の重点は手工業から工場工業および鉱業に移る。株式による生産企業が始まり、信用制度の発展とともに経済の蓄積過程を促進する。幾つかの大銀行と大経営工業が発生する。一八四〇年から一八四八年までに外延的な生産・搾取方法（die extensiven Produktions- und Ausbeutungsmethoden）の適用がいちじるしく現われ、新しい労働手段が既存のものに加わり、生産過程の機械化が強まり、雇傭者数は増加し、労働時間は絶えず延長される。かくして産業生産は十九世紀の初頭に比して五倍あるいは六倍となる。資本主義の外延的発展は、ひとり鉱業・繊維品工業・鉄工業のみならず、手工業的あるいはマニュファクチュア的に生産している部門、たとえば建築・印刷・フェルト加工・製陶・煙草加工などにも現われる。しかし、このようにドイツ経済の大部分において促進された生産力の発展は、一八四七――四八年にすでに一つの基本的危機（eine fundamentale Krise）におちいつた。すなわち生産関係による生産力の阻害であり、生産の増加にもかかわらず生産性の停滞を見ることになる。外延的な生産・搾取方法の適用は、しだいに労働力利用

の物的限界（die physische Grenze）に達し、一労働時間あたりの能率の本質的改善は不可能となる。こうした生産様式と労働階級の再生産との矛盾のほかに、経済的権力の担い手と政治的権力の担い手とのあいだの矛盾が現われる。ブルジョワジーは、土地貴族が支配権を握っている封建的国家を改造しなければならぬ。自分たちの状態を改善しようとしてたたかう労働階級も、政治的対決をおこなわねばならない。労働者は、自分たちの物質的利益を代表することを拒否する封建的支配にたいして、その支配のワクを破砕しようとするはずであり、彼らは同時にまた、資本において自分たちに立ちむかうブルジョワジーそのものとも対立する。一八四八年にフランスで革命が勃発したとき、ドイツでも生産および流通における資本主義のもとに、革命運動への前提条件はすでに存在していた。この年のドイツ革命では、初期の解放闘争および一八四九年の憲法運動において、ブルジョワと労働者には共通の目標があつた。ドイツの経済的政治的統一と民主的基本権とがそれである。しかし、ほんとうに決定的な反旧体制闘争は成功しなかつた。いわんや、社会の民主化という点において永続的な成果は、一段とおぼつかないものであつた。その失敗の原因は、ブルジョワジー、とりわけまず第一には大ブルジョワジーが貴族との長期にわたる闘争を回避し、政治的な力関係の決定的変化を断念したことにある。こうしたブルジョワジーの政治的態度の原因の一部は、若いドイツ資本主義の成熟度にあつた。ドイツ経済のうちで、まだ大きな部分が資本・賃労働関係によつて変革され、産業資本主義の発展のなかへ引きこまれえたはずである。しかるにブルジョワジーは、この可能なる経済的利益にもかかわらず、自分たちの階級および全ドイツ民族の真の政治的利益を裏切つた。さらに革命の終末は、ブルジョワジーとプロレタリアートとのあいだの階級対立によつて規定された。ブルジョワジーは政治的権利を労働者と分けもつこと、あるいは彼らに経済的譲歩をすることを欲しなかつた。要するにドイツ産業資本主義の一般的な発展状態が、革命的諸勢力の勝利なしに、基本的危機と社会的政治的緊張との一時的克服を許容したわけである。ドイツのブルジョワジーは自分たちの階級の政治的敗北をもつて資本主義のいつそうの発展を導入し、一八四

八年いらい、反動陣営の諸勢力にたいして、政治的社会的な諸運動をほしいままに抑圧させた。イギリスおよびフランスの上昇的ブルジョワジーとは逆に、ドイツのブルジョワジーは時代の政治的要請に対処しえなかつたのである。こうしてドイツ産業資本主義の早期は、一八五〇年代に完成される。手工業は、その諸部分がますますひろく近代産業化の過程にまきこまれるか、あるいは競争によつて潰滅していく。交通・商品取引・貨幣取引および産業において、経営の新設および拡大が強化される。生産の集中および資本の集中が始まる。経済の拡大と繁栄は、四〇年代に比して一〇〇パーセント以上の産業生産増加に現われている。ドイツが資本主義的経済社会へと決定的に変つていくことは、外延的な生産・搾取方法を経済のいつそうひろい諸部門、およびそれぞれの部門内での一段と大きな単位に適用していくことになつた。生産の機械化、賃労働者の雇傭数、労働時間の長さという点では、四〇年代と五〇年代とのあいだに、ただ量的な差があるだけであり、要するに程度の差にほかならぬ。一八四〇年から一八五九年にいたる早期産業資本主義の決定的段階（das entscheidende Stadium）を、このように観察すると、一八四八——四九年の革命は、単なるエピソード（blosse „Episode"）に見えてくる。この革命の結果として、生産・搾取の方法に質的変化が生じたわけでは決してない。しかし、ドイツを第一流の産業強国にまで発展させる基礎がつくられたのは、五〇年代である。一八五〇年にはまだマルクスおよびエンゲルスは、ドイツに一般的な近代的生産様式・生活関係および理念が欠けていると言いえたが、一〇年後にはそうは言えなくなつている。このことは、一八五七年の恐慌を見てもよくわかる。この恐慌は、ドイツ資本主義の生んだ最初の循環現象の一部である。一八四七年の危機は、まだイギリスから持ちこまれたものであつた。また、それは凶作とそれにともなう非資本主義的要因によつて決定されていた。しかるに、一八五七年のドイツ経済恐慌は産業地域におけるよりも農業地域において影響が少なかつた。変動の強烈さは、手工業・小商業・小工業（Kleingewerbe）への影響にもうかがわれる。これらの営業は、五〇年代におけるドイツ経済の繁栄の恩恵にわずかしか浴していないし、むしろ、しば

しば経済の近代産業化と集中運動との犠牲となつていたものである。この恐慌は、部分的には大資本の利益となるように破壊作用を及ぼした。労働者および職人にたいする影響も、それに劣らず甚大であつた。五〇年代までは、労働予備軍の形成は、大部分、一般におこなわれていた熟練労働者の遍歴によつて、隠蔽されていた。ところが一八五七年の恐慌およびそれにつづく不況局面では、はじめて失業というものが表面に現われ、この失業はもはや以前のようなやり方では救われなくなつている。五〇年代の終末とともに、ドイツ産業資本主義は、その最初の発展期の限界に決定的に到達する。その量的発展の頂点につづいておこつたのが一八五七年の恐慌であり、この恐慌からして、生産・搾取方法の質的に新らしいメルクマールをもつ第二期が、徐々に確立されていく――とトットは述べている。(註3)

ドイツ産業資本主義の第一期についてトットは以上のような概観を与えているが、その記述の個々の点については、検討の余地があるように思われる。一八四〇年代に果たして商品生産の重点が手工業から工場工業に移つたと言い切れるかどうかも、その一つであろう。また一八四八――四九年の革命を「単なるエピソード」と見る視角は示唆に富むが、これについても他の視角からは異論が出よう。しかし、ここではそうした問題に立入らず、さらにトットが一八四〇年から一八五九年にいたるドイツ労働者の状態の発展を述べているところを聞こう。それによると――自分の労働力を売り、資本側の需要に適応せざるをえない賃労働者の数は、ドイツでは産業革命いらい絶えず増加した。こうした賃労働者は、農民解放や独立的生活の破壊や婦人・小児の職業活動編入によつて得られた。一八四〇年以降では、大部分の手工業において資本主義的発展の結果として生じた変化が、プロレタリア化の過程で最大の役割を演じている。この変化は、とりわけ親方と職人との数的比率に現われていた。労働者は、形式的 (formal) にはツンフトの拘束および保障のうちに留まつていた。しかし、賃労働者としての職人の事実的地位 (die faktische Stellung) は、営業条令が労働の新性格を強く表現するにつれて、一段と明瞭になつていつた。労働階級の生存と再生産との諸条件は、社会の経済的社会的構造が変化し、

資本主義的生産が拡大するのに比例して、悪化する。労働者の状態を規定する決定的要因たる労働時間と実質賃金とは、一八四〇年から一八五九年にいたる期間に、外延的な生産・搾取方法の旗じるしのもとにあつた。すなわち労働時間の延長は、四〇年代と五〇年代とにおいて、単に程度の差を示すにすぎない。四〇年代には、たとえば「青い月曜日」(der blaue Montag 職工の休業日）の廃止、日曜労働の導入などのように、労働週間が延長される。五〇年代には、休憩時間の短縮などによつて労働日の集約化がおこなわれ、さらに手間仕事や夜間労働で労働時間が延長される。こうした長い労働時間の結果として生ずる肉体的消耗と精神的鈍化とに加えて、さらに労働階級の生計の悪化がある。たとえば、総実質賃金は一八四〇年から五九年までに、十九世紀初期の幾十年の水準を遥かに下廻つている。労働階級の生活、その衣服・住居・家族などの事情にかんする同時代の報告は、四〇年代に比して五〇年代にいかなる向上も見られないことを物語つている。自分たちの手で社会の富を増している労働者の状態の発展は、経済界の上昇運動とブルジョワジーの利潤増大とに反比例していた。このように一八四〇年から五九年までの全局面（die Gesamtphase）を考察すると、一八四八——四九年の革命期は、労働者の労働・生活関係の発展においては、一つの「幕間劇」(ein „Zwischenakt“) に見える。労働者と職人たちが革命のあいだにおこなつた闘争は、なんらの永続的変化をも強取（erzwingen）することができなかつた。それどころか、ブルジョワ革命にたいするブルジョワジーの裏切りは、労働階級の革命的運動に反作用を及ぼさずにはいなかつた。こうした条件のもとで、ドイツではブルジョワ社会による労働者の政治的経済的向上は妨げられ、ブルジョワ革命からプロレタリア革命への生長は不可能となつた。一八五〇年代に、資本主義的部門にはたらく労働者の貧困化は増大し、そうした部門以外の広汎な労働者や職人層も貧困化していく。産業資本主義の早期に対応する労働関係と生活関係は、労働者の個々の層に一段と普遍化し、均質化していく。この段階にいたつてはじめて、労働者は全く決定的に(mit aller Entschiedenheit) 階級として確立する——とトットは言う。(註4)

このような見通しのもとに、トットは一八五〇年代における当局の弾圧、ストライキ、労働者組織を検討している。ここで本稿の主題にとつて最も重要なのは五〇年代の労働者組織であり、トットはそれをマルクスのいわゆる「労働階級の先行組織」として把握するわけである。トットによると――十五世紀いらい、手工業職人はツンフトやイヌング（die Zünfte und Innungen）の内部で、自分たち自身の団体を所有していた。これらの団体は、職人の身分（der Gesellenstand）が独立生産者への過渡段階であつたかぎりにおいては、一種の利益代表機関（eine Interessenvertretung）の使命を果たしていた。しかし、封建的経済構成（die feudale Wirtschaftsformation）の解体、および産業資本主義の展開（die Entfaltung des Industriekapitalismus）につれて、こうした職人団体（die Korporationen）は、賃労働者の利益代表機関に課さるべき要請に応じえなかつた。労働者階級が自分たちの状態の悪化に立ちむかう闘争のためには、結社（Koalitionen）を必要とし、この結社は、賃金および労働条件の問題についての企業家との不断の対決（eine ständige Auseinandersetzung）、災厄の場合の相互扶助、および教養と意識との向上を目的としていた。ドイツ産業資本主義の早期の物質的諸条件から、必然的に一つの労働組合的活動（eine gewerkschaftliche Betätigung 旁点は小林）が発展した――とトットは書いている。(註5)

ここでトットが「封建的経済構成の解体および産業資本主義の展開」と言つているところから見ると、産業資本主義以前の早期資本主義の段階でも、賃労働者の発生とともに、旧来のツンフト制のワクのなかの職人組合が賃労働者の利益代表機関としての課題を果たしえない面が出てきていたことを認めるかのようであるが、しかし彼女は本書では「産業資本主義の展開」以降においてのみ、「先行組織」の「労働組合的活動」を強調する。トットによれば、「形式上は、労働者および職人の団結は部分的に職人組合のような過去の諸組織から出発することができた。内容的には、それらの団結は資本側の侵害にたいする労働者の抵抗の中心にまで発展し、階級闘争の前形式に、『先行組織』にならねばならなかつた。」

(Der Form nach konnten die Zusammenschlüsse der Arbeiter und Gesellen teilweise an Organisationen der Vergangenheit, wie es die Gesellenbrüderschaften waren, anknüpfen. Inhaltlich mussten sie sich zu Zentren des Widerstandes der Arbeitenden gegen Übergriffe des Kapitals entwickeln und zu Vorformen, zu „previous organisations" des Klassenkampfes werden.) ここでもトットは形式と内容の両面から見て、形式的には古い職人組合の組織を踏襲するものがあつても、内容的には、その組織がすでに変質していることを鋭く指摘する。(註8)

それでは、具体的にいかなる組織が存在したか。トットは、一八四八年の革命前すでに、「労働者および職人の労働組合的団結および活動の三つの種類」(drei Arten gewerkschaftlichen Zusammenschlusses und der Betätigung der Arbeiter und Gesellen 旁点は小林) があつた、とする。相互扶助基金 (Unterstützungskasse)、労働者教養協会 (Arbeiterbildungsverein) およびストライキ団体 (Streikkoalition) がトットの言う三つの種類すなわち基本形式 (Grundformen) である。ドイツ労働運動のこうした早期的諸形式 (diese frühen Formen) は、さしあたり互いに並列しており、また一見 (scheinbar) 互いに独立するかのごとく存在していた。しかし、四〇年代にすでに二三の職業部門では、労働組合的活動の「或る組織的統合への萌芽」(Ansätze zu einer organisatorischen Zusammenfassung) が示された、と言う。ここでは、トットが「労働組合的活動」をおこなつたものとして最も重視している相互扶助基金について、彼女の所説をかえりみよう。それによると——相互扶助基金は職人組合 (Gesellenbrüderschaft) の疾病・死亡金庫 (Kranken- und Totenlade) から発展した。ツンフト員の自助は十八世紀の末いらい、疾病・死亡・不具老朽 (Invalidität)・遍歴の場合の相互扶助を包括していた。資本主義的発展がツンフトの拘束と保障とを解体させると、こうした扶助活動が一段と重要性を増してくる。したがつて職人組合を弾圧しようとする立法も、基金制には一八四〇年代

まで手をつけなかつた。この時代にツンフト職人の新らしい相互扶助団体（Unterstützungsverein）が数多く発生した。マニュファクチュアや工場の労働者も、それぞれの職業別の基金（gewerbliche Kassen）を組織した。これらの基金は、ひとり災厄の場合の自助の重要手段たるのみならず、またしばしば親方・工場主・当局にたいする労働者の経済的利益を代表した。相互扶助団体は労働市場や賃金政策にたいする影響力をかち得ようと努めたし、さらに遍歴基金 Viatikumskassen（Wanderunterstützung）の金で失業者を扶助し、一部はストライキをしている人々を助けた。こうした理由から、基金の独立をめぐる闘争が労働階級によつて極めて烈しくおこなわれた。マルクスのいう「先行組織」のうち、この形式のものが一八〇〇年から一八四七年まで職種別にどれだけあつたかは完全にはわからないが、判明しているだけでもつぎのようになつている、とトットは統計をあげる。

印刷工	三〇	葉巻労働者	二
建築工	一〇	キャラコ捺染工	一
木工	八	粗毛布織工（Haartuchweber）	一
食料品職（Nahrungsmittelgewerbe）	五	磁器労働者	一
商業・運送	四	その他	四

トットが巻末につけている一八五〇年代に存在したドイツ労働者団体のリストによつて、私が種類別に数をあたつてみると、つぎのようになる。

相互扶助基金……五二六

遍歴扶助組合（Wanderunterstützungsverein）：一四二（うち一〇八は、右の相互扶助基金を組織している人々と同じ人々によつて組織されている）

労働者教養協会……　八八（うち三二は、右の相互扶助基金または遍歴扶助組合を組織している人々と同じ人々によつて組織されている）

右のうち労働者教養協会は、トット自身も認めているように、自由主義的および保守的ブルジョワが加わつていて、労働組合的活動の面からは比較的に重要性が少ない。ただし、一八五六年にフランクフルト・アム・マインでつくられた唱歌会「フィラデルフィア」(Singeverein" Philadelphia")は、ヴァイトリング的な手工業職人共産主義(der Weitling-sche Handwerkerkommunismus)の影響を受けた宗教的社会主義の教説をもつ庭師職人(Gärtnergehilfe)ヨーハン・ヤーコプ・クット(Johann Jakob Kutt)を中心とするもので、一八五七年にストライキが方々におこると、マイン州地方で大いに活躍した、とトットは言う。しかし、これは教養協会としては例外的存在であることをトットも是認している。(註8) 一八五〇年代にトットのいわゆる「労働組合的活動」をしたのは、主として相互扶助基金および遍歴扶助組合であつた。トットの非常な努力をものがたる巻末の詳細なリストのなかから、サンプル的に、ベルリンそのほか五都市における相互扶助基金（相と略記）と遍歴扶助団体（遍と略記）だけを抜きだしてその創立年（創立年が不明のときは、史料によつて存在の明らかな最古年）と職種をあげると、つぎのようである。

ベルリン市

創立年	組織の種類	職種
一七三二（一八五〇存在確認）	相	石だたみ工 (Steinsetzer)
一八四三	〃	書籍販売員 (Buchhandlungsgehilfen)
一八四八	〃	印刷工 (Buchdrucker)
一八四九	〃	機械製造工 (Maschinenbauer)

一八五〇	〃	馬具職の工場労働者 (Fabrikarbeiter)
〃	〃	鞍工 (Sattler) および馬具用革紐職人 (Riemergesellen)
一八五一	〃	織布職人 (Tuchmachergesellen)
〃	〃	製陶職人 (Töpfergesellen)
一八五二	相・遍	葉巻労働者 (Zigarrenarbeiter)
〃	相	錫鋳造工 (Zinngiesser)
〃	〃	煙突掃除夫 (Schornsteinfeger)
〃	〃	針工 (Nadler) および篩工 (Siebmacher)
一八五三	相・遍	製磁労働者 (Porzellanarbeiter)
〃	相	兵器鍛工 (Zeugschmiede)
〃	〃	靴下製造工 (Strumpfwirker)
〃	〃	石鹸製造工 (Seifensieder)
〃	〃	屋根ふき職人 (Dachdeckergesellen)
〃	〃	鬘製造工 (Perückenmacher)
〃	〃	櫛製造工 (Kammacher)
〃	〃	パン焼職人 (Bäckergesellen)
一八五四	〃	鋳字工 (Schriftgiesser) および彫字工 (Schriftschneider)
〃	〃	理髪職人 (Barbiergesellen)
一八五五	〃	金製品工場の労働者 (Arbeiter der Goldwarenfabrik)
〃	〃	羅紗ケバ切工 (Tuchscherer)
〃	〃	製帽工 (Hutmacher)

〃	〃	井戸掘工	(Brunnenbauer)
一八五七	〃	機械工	(Mechaniker) および眼鏡工 (Optiker)
一八五八	〃	工場女工	(Fabrikarbeiterinnen)
〃	〃	（諸職種にわたる）工場労働者	(Fabrikarbeiter)
〃	〃	キャラコ捺染工	(Kattundrucker) および造型工 (Formstecher)
〃	〃	石版印刷工	(Steindrucker) および石版画工 (Lithographen)
一八五九	〃	葉巻選別工	(Zigarrensortierer) および煙草捲工 (Tabakspinner)
〃	〃	マイヤー工場	(die Meyersche Fabrik)
〃	〃	リボン製造職人	(Bandmachergesellen)

ハンブルク市

一七九四	相	粗パン焼工	(Grobbäcker)
一七九六	〃	白パン焼工	(Weissbäcker)
一八〇五	〃	小帆船乗員	(Ewerführer)
一八二一	〃	石だたみ工	
一八四九	〃	石版印刷工および石版画工	
〃	〃	皮なめし工	(Gerber und Ledertauer)
一八五〇（最古年）	〃	船大工	(Schiffszimmerer)（四の相互扶助基金結成）
一八五三（最古年）	相・遍	葉巻労働者	
一八五三	相	葉巻選別工	
一八五四（最古年）	〃	印刷工および鋳字工	

〃	〃	〃	木製スリッパ工	(Holzpantoffelmacher)
一八五五	〃	〃	波止場人足	(Schauerleute)
一八五六	〃	〃	錠前工	(Schlosser)
〃	〃	〃	醸造職人	(Brauereigesellen)
一八五八	〃	〃	ブドー酒桶工	(Weinküfer)
〃 (最古年)	〃	〃	商店員	(Handlungsgehilfen)
一八五九	〃	〃	製帽工	
		〃	製菓職人	(Konditorgehilfen)
ライプチッヒ市				
一八四〇	相		書籍販売市場員	(Buchhandlungsmarktheifer) (二基金結成)
一八五二 (最古年)	相・遍		葉巻労働者	
一八五三	相		印刷工	
ミュンヘン市				
一八〇二	相		パン焼職人	
一八四八	〃		印刷工	
一八五〇 (最古年)	〃		手袋製造工	(Handschuhmacher)
一八五九	〃		桶屋職人	(Schäfflergesellen)
ブレーメン市				
一八四八	相・遍		葉巻労働者	

〃	〃	「北ドイツ労働者同盟」(Norddeutscher Arbeiterverein)	
一八五一	〃	印刷工	
ブレスラウ市			
一八五〇	相・遍	葉巻労働者	
〃	相	印刷工	
一八五一（最古年）	〃	商店員	
一八五二（最古年）	〃	石だたみ工	
一八五八	〃	仕立女工 (Näherinnen)	

トットはこの巻末のリストで、その組織が単にその地域だけにとどまらず、ひろく他地域とも連絡をとつて活動しているものについては、「超地域的」(überregional＝略符ür) と特記している。右にかかげた私の抜粋リストで、ベルリン市については、一八四八年創立の印刷工の相互扶助基金、一八五二年の葉巻労働者の相・遍、一八五三年の製磁労働者の相・遍が「超地域的」とされている。ハンブルク市のものでは、一八五三年（最古年）の葉巻労働者の相・遍、一八五四年（最古年）の印刷工および鋳字工の相が「超地域的」である。ライプチッヒ市では、一八五二年（最古年）の葉巻労働者の相・遍、一八五三年の印刷工の相がそうであり、ミュンヘン市のものでは、一八〇二年のパン焼職人の相を除く他の三つは、いずれも「超地域的」の部に属する。ブレーメン市では、一八四八年の葉巻労働者の相・遍、一八五一年の印刷工の相・遍が、またブレスラウ市では、一八五〇年の葉巻労働者の相・遍、同年の印刷工の相が「超地域的」とされる。トットは従来の職種別組織研究（たとえば、アルマンの「ドイツ・パン焼工および製菓工運動史」一九一〇年刊、バスナーの「ドイツ鍛冶工運動史」一九一二年刊など）(註5)も利用しているが、とりわけ、これまで利用されなかつたザクセン

内務省文書の警察がわの報告にもとづく部分が光つている。こうした新研究によつて、一八五〇年代のドイツ労働者組織が、これまで考えられていたよりは遥かに活発に動いた面のあることを指摘した点は、トットの大きな功績であろう、ただし、ザクセン内務省文書に近ずきえないわれわれとしては、せめて重要な部分の原文抜粋だけでも、もつと豊富に巻末の注釈として付けてもらいたかつた。

九

トットは最後に結論として、自分がおこなつた一八五〇年代のドイツにおける「労働組合的」な活動の研究によつて、労働者および職人たちの「活発な活動」(die lebhafte Aktivität) が立証された、とする。すなわち、ドイツの労働階級は、産業資本主義早期の外延的生産・搾取方法から結果する労働条件および生活条件の悪化に対抗する必要より出発して、自分たちの経済的および社会的利益を代表するための諸団体をつくつた。この運動は、もともと単に窮乏と貧困への反抗にすぎなかつたが、一八四〇年代、さらに五〇年代には一段とつよく、相互扶助基金・スト団体・教養協会という姿で一つの意識的構成体をかち得た。この早期の「労働組合的」活動は、主として職種別 (fachlich) に組織されていて、さしあたり純粋に地域的 (regional) な性格しかもたなかつた。こうした職種別的限界の克服、超地域的(überregional) 団結への発展、それにともなう互いに連繋ある階級運動への展開は、四〇年代に始まり、一八四八年には中央化された諸団体として実現した。これがドイツ労働運動の早期的頂点であるが、この頂点はとりわけ市民革命における出来事のうちに、すでに解体されてしまつていた。しかし、物質的諸条件から生長していた「先行組織」の、徐々に前進する発展行程は、単に一時的に中断されたにすぎない。(Der allmählich fortschreitende Entwicklungsgang der „previous organisations", die aus den materiellen Bedingungen erwachsen waren, wurde nur vorübergehend unterbro-

chen.）近代的政党と労働組合とに基盤を用意しうるためには、さらに一八五〇年代における「労働組合的」活動の量的発展の時代を必要とした。このドイツ労働史の第一期では、舞台の前面に出たのは、プロレタリアートのうち、熟練労働者として手工業およびマニュファクチュアではたらいていた諸グループであつた。しかし、五〇年代はすでに、工場プロレタリアートの活動の増加をも示していた。こうした第一期の特色は、闘争の主内容が労働者および職人の直接的な経済的利益であつた点にある。「労働組合の仕事（die Gewerkschaftsarbeit）の重点は、相互扶助制（das Unterstützungswesen）およびストライキ運動にあつた」（傍点は小林）――とトットは述べている。(註二)ここでトットが「労働組合的」（gewerkschaftlich）と言わずに「労働組合の」（Gewerkschafts-）という表現を用いていることは、良くないと私は考える。このゲヴェルクシャフツ・アルバイトという表現は、この著書のあちこちに見える（たとえば八七、八八、一〇一、一〇二などの諸ページ）。しかし、一八五〇年代の労働者組織が「労働組合」ではなく「労働階級の先行組織」であり、その活動が「労働組合活動」ではなくして、「労働組合的活動」であることは、この著書の最も重要な主張の一つではないか。そうとすれば、「ゲヴェルクシャフツ・アルバイト」というような表現は、避けねばならぬはずである。

さらにドイツ労働運動第一期の特色は、トットによると、労働階級の団体と彼らの闘争が全く法的基礎をもたないか、あるいは極めてわずかしかそれをもたなかつた点にある。むしろ活動は、法律およびその実際的適用の仕方によつて、異常に困難化されていた。しかし、こうした五〇年代の非合法的状態および弾圧も、ドイツ労働運動の「いつそうの発展」（die Weiterentwicklung）を妨げることはできなかつた。物質的前提条件や革命によつて呼びさまされた自覚や革命前の「労働組合の仕事」（Gewerkschaftsarbeit）の伝統は、五〇年代にも労働者や職人の社会的闘争を絶えず前進させ（vorantreiben）た。一八六〇年代とともにドイツ労働運動史の第二期が始まると、このドイツ労働運動は、成熟せる資本主義のもとに、第一期の利益代表と闘争との基礎の上に立つて、さしあたりまず全ドイツ労働者同盟をもつて、やが

て確立された諸労働組合をもつて（mit festgefügten Gewerkschaftsverbänden）、さらに社会民主労働者党をもつて、押しすすめられる――というのである。こうした研究成果をひつさげて、トットはドイツ労働運動の発生史にたいする従来の通説を決定的に批判しうる、とする。

（a） 一八五〇年代を「鎮静」期および「死滅「期（„stille“ und „tote“ Zeit）とする判断は、全く明瞭に反論され、是正された。

（b） これと同時に、ドイツにおける労働運動はいつ始まつたか、一般的社会史のいかなる時期にまず登場するか、という問題も答えられる。この運動の開始期を一八六〇年代に置く一切の記述は、拒否される。この運動にハッキリと「近代的」（modern）とか「包括的」（umfassend）とか「本来の」（eigentlich）とかの形容詞をつけて一八六〇年代に始まると言い、単に補足的に一八四八年の革命以前（Vormärz）および四八――四九年におけるこの運動の先駆者を指摘する場合にも、判断の誤りをまぬかれない。労働運動をその中期的成熟（mittlere Reife）以降においてはじめて適合的（relevant）なものと見なす人は、それより以前の幾十年かの運動との連関を正当に認識すること稀れであろう。早期ドイツ産業資本主義における、とりわけ五〇年代における「労働組合的」（gewerkschaftlich）活動の内容と意義とについての理解こそ、決定的なものである。一段と成熟した運動は、先行組織から引き出されねばならぬ。（Die reifere Bewegung muss aus den previous organisations abgeleitet werden.）

（c） ドイツでは政党が労働組合的活動（die gewerkschaftliche Tätigkeit）に先行するという見解は、ドイツ労働運動の第業期がラッサールの労働者党から始められるかぎりにおいてのみ、是認されうる。この見解は、それがこのような限定をつけられずに一般的に主張される場合には、全ドイツ労働者同盟が四〇年代および五〇年代の労働組合的活動に決定的に立脚しえたという事実を見落している。

要するに、ドイツ産業資本主義の外延的時期における早期の労働組合的団結（die frühen gewerkschaftlichen Zusammenschlüsse 傍点は小林）は、のちの労働組合（die späteren Gewerkschaften）の果たした一連の使命を果たしており、同時にまたそれは、労働階級の政党がそこから出てくるところの細胞でもある。ドイツ労働運動の早期が他の国々の運動と異つているのは、ちようどドイツの資本主義的経済および社会がその開始段階において他の国々の資本主義と異つているのと同じく、単に程度の差にすぎない。とりわけ共産党宣言のなかですでに提示された一般的運動法則は、ドイツ労働運動の発展行程にも当てはまる――とトットは結んでいる。(註11)

十

以上、トットの見解をかえりみたのであるが、彼女の結論の（a）については、異論の余地はあるまい。一八五〇年代を労働運動の「鎮静期」とする従来の通説は、トットの実証的研究によつて見事にくつがえされた。彼女がこれまで利用されなかつたザクセン内務省文書、プロイセン通商省文書などを縦横に駆使して、とりわけ一八五〇年代のストライキ運動その他の動きを明らかにした功績は、ドイツ初期労働運動史の研究にエポックを画するものと言えよう。（b）についても、ドイツ初期労働運動を産業資本主義と関連させて理論的に位置づけた功績は大きいと言わねばなるまい。もちろん。彼女の論述のこまかな点については、なお異論の余地のあるものも少なくないであろう。しかし、一八五〇年代までの労働者組織を「先行組織」として把握することは、トットのすぐれた着眼である。

最後に（c）でトットが反論しているのは、ドイツの労働運動がラッサールから始まるとする見解にたいしてである。ラッサールの組織した全ドイツ労働者同盟をドイツにおける最初の労働者政党とする前提のもとに、「ドイツでは労働者政党が労働組合的活動に先行する」という主張がなされるならば、それは、この全ドイツ労働者同盟そのものが四〇年

代および五〇年代の「労働組合的」活動の基盤の上にはじめて可能であつた事実を忘れている、とトットは強調するのである。そのかぎりにおいて（c）のトットの主張は正当であろう。しかし、そのあとで彼女が「ドイツ産業資本主義の外延的時期における労働組合的団結は、のちの労働組合の果たした一連の使命を果たしており、同時にまたそれは、労働階級の政党がそこから出てくるところの細胞でもある」（旁点は小林）と言う場合、トットは、本稿（上）の初めに私が述べたような、労働者階級の党と組合との関係についてのスターリンの言葉を念頭に置いているという可能性が皆無とは言えないように思われる。万一そうとすれば、これについては異論の余地がある。

ゲルハルト・ヴィンクラー（Gerhard Winkler）は、カール・オーバーマンの「一八四八年の革命におけるドイツ労働者」（一九五三年改訂第二版）への書評で、このスターリンの所説に言及して、次ぎのように述べている。――ドイツおよびヨーロッパ一般において労働者階級の党は労働組合から出てきた（aus den Gewerkschaften *hervorgegangen sei* イタリック原文のまま）というスターリンの言葉の引用を、現実と一致させようとする試みがすでに時々企てられた。それは成功しなかつた。たとえば、レーニンが「なるほど小さくはあるが、しかし真にプロレタリア的な党」と呼んでいる「共産主義者同盟」（„Bund der Kommunisten"）が労働組合運動（die Gewerkschaftsbewegung）から出てきたという証拠は、たとえいかに僅かなものでも、なに一つ存在しない。（Kein einziger, wenn auch noch so dürftiger Beweis liegt vor, ……）またこの主張は、一八六九年アイゼナッハで創立された「社会民主労働者党」（„Sozialdemokratische Arbeiterpartei"）にも適合しない。これらの同盟や党の先駆たる労働者教養協会や民衆協会を労働組合と見なすことは困難であろう。（Schwerlich wird man aus ihren Vorläufern, den Arbeiterbildungsvereinen und den Volksvereinen, Gewerkschaften machen können.）最後に、「ドイツ共産党」（„Kommunistische Partei Deutschlands"）がドイツ社会民主党の左翼から出てきたことは、疑いの余地がない。オ

ーバーマンは上記スターリンの言葉を引用して、次ぎのように論じている。いわく「しかし労働者大衆は工業協会や手工業協会（die Gewerbe- und Handwerkvereine）の労働組合的諸要求（die gewerkschaftlichen Forderungen）を支持した。それゆえに、ドイツでは労働組合は党より前に発生した（二一四ページ）」と。私（ヴィンクラー）の見解によれば、もしストライキ闘争がとりわけ、あの「労働者友好協会」（„Arbeiterverbrüderung"）のなかに結合された労働者諸組織によつて指導されたという事情からして、これらの組織が労働組合組織（Gewerkschaftsorganisationen）であつたと結論しようとするなら、それらの組織のもつ特殊の性格は隠蔽されることになる。なかんずく印刷工と煙草労働者は明らかに労働組合を結成した。しかし、一八四八年に設立された労働者諸団体の性格にかんする問題はさしあたり未決定のままとしても、一つのことだけは確実である。すなわち、結成される「社会民主労働者党」はその起原と伝統（ihren Ursprung und ihre Tradition）を、これらの労働者団体にではなく、マルクスおよびエンゲルスに、「共産主義者同盟」に、マルクスによつて指導された「国際労働者協会」（„Internationale Arbeiterassoziation"）に負うている、という一事である。これらの革命的な諸伝統こそ、党の創立へとみちびいたものであるが、それらの伝統がほとんど二〇年後ふたたび生気を得てモノをいうようになる基盤（der Boden, auf dem diese revolutionären Traditionen, die zur Gründung der Partei führten, fast zwanzig Jahre später wieder lebendig und wirksam wurden, ...）は、労働組合からではなく、教養協会や民衆協会から成つていた。それらの協会の内部で労働者たちが小市民的な影響から脱却してイデオロギー的および組織的な独立へと発展したところの、そういう協会から成つていたのだ――とヴィンクラーは説いている。(註12) ここでヴィンクラーが強調しているのは、ドイツにおいて労働者階級の党は労働組合から出てきたというスターリンの言葉は歴史事実に反する、ということである。この点、私はヴィンクラーの主張が正しいと考える。しかし、初めに断つたように、この問題も本稿の主題の範囲外に属するので、ここでは立入らないこ

とにする。ただし、トットは先に見たように、彼女の結論の（c）で、一般論的に労働者階級の党と組合との関係について積極的な立言をしているのではなく、消極的に、ドイツにおいて労働者政党が「労働組合的」活動に先行するという立言に反対しているだけである。したがってトットは、（c）にかんするかぎり、ヴィンクラーのオーバーマン批判からは影響を受けない。

トットのように一八五〇年代の労働者組織を「先行組織」と見なし、その活動を「労働組合的」と規定することは妥当であると考えられるけれども、ワルンケのように、この時期の運動をハッキリと「労働組合運動」(Gewerkschaftsbewegung) と呼ぶことは、許されまい。もちろんワルンケはトットの研究にもとづいているので、die gewerkschaftlichen Organisationen とか der gewerkschaftliche Zusammenschluss というような表現も使っているけれども、トットの主張のキー・ポイントをなす「先行組織」の理論を抜きにしているため、ワルンケの「労働組合運動」という表現が不当な重みをもってくる。ここにワルンケの重大な誤りがあると私は考える。

トットがマルクスの「先行組織」にもとづいて、ドイツ産業資本主義第一期の労働者組織の位置を明快に理論づけた功績は大きい。しかし、彼女はあまりにも自分の理論を強調し、それを立証することに急で、この期の「労働組合的」組織の積極面に目をうばわれ、その消極面、すなわち組織に属する人々の多くに根づよく残存したツンフト意識の面を忘れているのではなかろうか。労働者および職人たちの経済闘争のうちに第二期の活動の萌芽形態が含まれていたことは事実であろうが、そうした先駆的な面のみを強調しすぎてはいないか。確かに職人組合は、十九世紀の前半に大きく変質していよう。このことを形式と内容との二面から論じたトットの分析の切れ味は見事であるが、果たして五〇年代の「労働組合的」活動は、トットのいうほど六〇年代の運動に直接的につながっているだろうか。もし、それほどにつながっていたら、ベーベルがその自叙伝で述べているような状態は、いかに説明さるべきであろうか。先に見たように、ベーベルはドイツ

近代産業化の先進地の一つであるザクセンにおいてすら、職人や徒弟の大多数はまだ、いつかは自分たちも親方になれるという確信をいだいていた、と書いている。とりわけ一八六〇年代のはじめには、ザクセンその他の諸邦にも営業自由の原則が導入されたので、いっそうこの信念が強かった、とも述べている。この原則の導入は、トットが説いているような面とちがった面の影響をも及ぼしているわけである。ベーベルによれば――一八六〇年代に入っても、労働者の政治的教養は非常に乏しかった。彼らは一八五〇年代すなわち最も暗い反動の諸年に生長し、この諸年には一切の政治的生活が生気を失っていたので、彼らは政治的に活動するいかなる機会ももっていなかった。社会主義と共産主義は、当時のわれわれ若者には全く未知の概念であり、いわゆるボヘミアの村々だった。ヴァイトリング的共産主義に属してヴァイトリングの著書を読んでいた孤立的人物もいたが、しかし、それは例外だった。たとえば共産党宣言を知っていて、革命時代のライン州におけるマルクスおよびエンゲルスの活動について何か知っている労働者があるなどということを、私は当時ライプチッヒで全く耳にしたことがない。以上のすべてから判明することは、そのころ労働者層は、階級的関心をもたぬような、また社会問題の存在を知りもせぬような立場に立っていたということだ――とベーベルは言う。なるほど、ブルジョワジーの進歩的分子によって指導された教養協会に労働者層が集ってきて超満員になるという盛況は、トットが指摘したように、産業資本主義第一期を経て第二期に入った労働者の状態によるであろう。また第二期における労働運動の高揚は、第一期における先行組織の「労働組合的」活動を知ることによってはじめて正しく理解されることも事実であろう。しかし、トットのように五〇年代の積極面のみを強調することは、反動の十年間がドイツ労働運動に与えた傷の深さを忘れるおそれなしとしない。また、そこでは五〇年代の労働者組織の変質のみが過度に力説されて、これらの組織、とりわけ相互扶助基金に根づよくつきまとっていたツンフト遺制の消極面が強引に消されている。

もちろん、先にあげたベットヒャーの「ブレーメンにおける労働運動の端緒と発展」のように、「革命の諸年の労働運

動は、ブレーメンではドイツの他地方におけると全く同様に、いかなる作用をも後に及ぼさなかった。実際には一八五二年いらい、もはやいかなる労働運動も存在しなかった」という西ドイツの歴史家的断定の誤っていることは明らかであろう。この書の出版は一九五三年であり、トットの労作が刊行されたのは、その三年前の一九五〇年である。トットの研究を虚心坦懐に読めば、少なくとも彼女の主要論点の正当性は、なにびとも否定できないであろう。たとえばトットはザクセン内務省文書によって一八五四年にハノーヴァーとブレーメンで「他邦左官職人の会」(„Gesellschaft fremder Maurergesellen")の秘密組織が警察によって発見され、翌年ブレーメンでは裁判が開かれて二〇人の職人が禁錮一年以下の刑に処せられた事実を明らかにしている。(註)またトットが巻末にかかげた一八五〇年代の地域別の労働者組織のリストによっても、先に記した相互扶助基金のほかに、ブレーメン市には一八五二年以降に次ぎのような団体が存在する。

創立年	組織の種類	活動範囲
一八五二年	「他邦」指物職人の労働者教養協会 (Arbeiterbildungsverein der "fremden" Tischlergesellen)	地域的 (regional)
一八五四年 (最古年)	左官の会 (Gesellschaft der Maurer)	超地域的 (überregional)
〃 (最古年)	白なめし工の会 (Gesellschaft der Weissgerber)	〃
一八五五年 (最古年)	車大工の会 (Gesellschaft der Stellmacher)	〃
一八五八年 (最古年)	帽子工の会 (Gesellschaft der Hutmacher)	〃
〃 (最古年)	大工の会 (Gesellschaft der Zimmerer)	〃

右のような組織が存在するからには、ベットヒャーの誤りは弁護の余地がない。しかしながら、ベットヒャーが「大衆は自分たちが一つの強い統一的勢力を構成しているという自覚を完全に欠いでいた」と言うとき、われわれは五〇年代の労働者大衆のうちに存在する消極的な面を否定することはできないであろう。私が先に「一八六〇年代のドイツ労働組合

とツンフト遺制」で述べたところは、トットの理論によつて修正すべき部分も少なくないが、しかし熟練労働者にツンフト的意識が根づよく残存したことは事実であろう。そうでなかつたら、六〇年代以降における新らしい労働組合運動の指導的人々があれほど骨を折らなくても済んだはずだから。トットの主張があまりにも理論的に割切りすぎて、現実の労働者大衆の意識を積極的な面だけにしぼつて見ている嫌いのあることだけは、ここでくり返し強調しておきたい。なお、トットが主として利用したザクセン内務省文書は、現在、東ドイツで部分的に刊行されつつあるが、五〇年代の労働者の状態に関するものが一日も早く刊行されることを希望してやまない。

註（1）Todt, Elisabeth : Die gewerkschaftliche Betätigung in Deutschland von 1850 bis 1859. 本稿（中）（思潮第七十輯一七ページ）の「一八五〇——一八五九年のドイツにおける労働組合活動」は「一八五〇——一八五九年のドイツにおける労働組合的活動」の誤りなので訂正する。

（2）ユルゲン・クチンスキーは一八〇七——一八一一年を「上からと外からの経済革命」(die ökonomische Revolution von oben und aussen) と呼ぶ。(Todt und Radandt: Zur Frühgeschichte der deutschen Gewerkschaftsbewegung 1800—1849. Mit einer Einleitung von Jürgen Kuczynski. Berlin 1950. S. 9.) これならば差支えないであろうが、産業革命では、おかしい。

（3）Todt: Die gewerkschaftliche Batätigung, SS. 7, 11—15.

（4）Ibid., SS. 15—17.

（5）Ibid., S. 17.

（6）Ibid.

（7）Ibid., SS. 18—19.

（8）Ibid., SS. 19, 91.

（9）Allmann, O. : Geschichte der deutschen Bäcker- und Konditorbewegung, 2. Band, Hamburg 1910. Basner, E.: Geschichte der deutschen Schmiedebewegung, 1. Band, Hamburg 1912.

（10）Todt, S. 101.

（11）Ibid., SS. 102—103.

（12）Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, Ⅳ. Jahrgang (195 6), Heft 6, SS. 1308—1309.

（13）Todt, S. 49.